世界市民育成としての幼児教育

―周郷博先生を想いながら―

宮原　修

昨年（一九九二年）の夏は暑かった。とくに私の住んでいる千葉や東京は、八月から九月にかけて、雨らしい雨の降らない日が三十日以上も続いた。「残暑が厳しい」などというものではない。地上が完全に干上がってしまったのである。街路樹（とくにつつじ類）は赤茶けたちりちりの葉になってしまい、見るも無残で見るたびに胸がキリキリ痛んだ。自然環境破壊が一つの大きな原因となって、世界的な異常気象が起こっているのは明らかだろう。その環境破壊に日本人が大きく加担しているのも明らかだ。そういえば湾岸戦争によるクウェートの石油基地の火災はどうなったのだろうか。そのことも私は思い出さざるを得なかった。

そんな折りに私は、『周郷博著作集』（全六巻と別巻、柏樹社）を読んだ。私は周郷先生の〝悲憤慷慨〟に接し、第一巻に収められた論稿が出された一九七〇年代の状況を思い出しながら、改めて共鳴するところ

も多く、いよいよ頭に血が昇り、熱病のような状態になった。

周郷博先生は、お茶の水女子大学教授で幼稚園長も兼任されたが、一九八〇年二月二八日に七十二歳で亡くなられた。私はその年の四月からお茶の水女子大学に勤務し出したので、何か因縁のようなものも感じるが、私は周郷先生に一面識もなかった。正直のところ、ハーバード・リードの翻訳等で多少存じ上げていた程度で、幼児教育等についてこんなに多くご発言されているとは知らなかった。

周郷先生は一九六九年から度々ヨーロッパを訪ね、アメリカ・メキシコ、カナダ、そして中国へも行き、現地の自然や人々と交流を重ね、感激して帰国している。とくにヨーロッパや中国での感激はひとしおだったようである。そして周郷先生はヨーロッパや中国の眼から七〇年代の日本を見て、〝悲憤慷慨〟されていたように私には思える。そして実はその眼は、先生が生まれ育った千葉の田舎（現八千代市近郊）や、高度経済成長以前の日本を懐かしむ眼と重なると私には思える。

実は私も、一九八〇年代にイギリスを中心とするヨーロッパを四度ほど訪ね、一九九〇年代にはアメリカ、台湾、中国を訪ね、周郷先生と似たような眼をもった気がする。そして私は「日本人は変わらなければならない」とさえ思う。より自由な立場から人間を「変える」ことができるのは、保育者・幼児教育者達だろう。そんな思いを込めて、私は周郷先生を片思い的に想いながら、これからの幼児教育について考えることを述べてみたい。

エデュコロジーということ

周郷先生は、オランダの教育学者M・ランゲフェルトの「教育は、われわれが概念化することによってつくり出すものでは決してない。」教育とは、「われわれが日常生活において出会っているもの」にほかならない、という主張に強く共鳴し、彼の唱える「教育生態

学」（educology）に賛意を表明している。ちなみに著作集第一巻のⅢは「母と子のエデュコロジー」というタイトルのもとに編集されている。

エデュコロジーという用語は、言うまでもないが、エデュケイションとエコロジーの合成語である。エデュコロジーの意味内容はランゲフェルトに任せるとして、今流に一言で言えば、「環境による教育」ということになろう。この世に学校（幼稚園、保育園を含む）ができるずっと以前から、人間（子ども）は教育され一人前の大人となり、現代にも強い影響を与える文明を創り出してきた。その教育とは、教師ではなく、親（母）や地域（部族）社会の大人達、そして彼らを囲む自然環境のもとで、まさに日常生活的に行われてきた行為である。そこで子ども達は人間として持って生まれた様々の能力を開発され、人類を存続させてきたのである。それが教育（エデュケイション）の根源といえるものである。そのような根源的な教育を、現代の学校教育（大人達）はどれほど意識しているだろうか。われわれは傲慢にも、学校や意図的教育のみが現代の文明を創ったと思ってはいないだろうか。しかも、現代の文明が人類や自然環境（世界）を破滅に導いているとしたら、学校や意図的教育とは何なのだろうか。

ところで、エコロジー（環境）の面について付言すれば、私は一九八二年に初めてイギリスの幼稚園・小学校を訪問したが（その時の現地調査を中心とする内容の書物としては、稲垣忠彦編『子どものための学校』、東大出版会UP選書がある）、その訪問の帰りに私は極めて幸運な体験をした。ロンドンのヒースロー空港を出発したのは午前十時過ぎで、南回りで成田空港に着いたのは午後四時頃だったと思うが、その間私は窓際の席で、文字通りずうっと地球を眺めることができた。つまり、ヨーロッパのアルプス上空、中東、インド、中国上空を一点の雲もなく見渡すことができた。それは誠に稀な幸運な体験であったようだ。何十回となく世界を飛び回っていた大学の先生もそのよう

な幸運はなかったそうである。

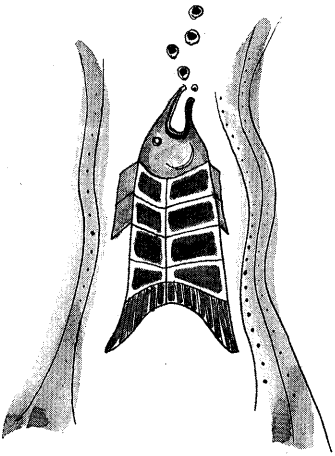
さてその時私が見た地球は、青ではなかった。茶褐色だった。私が見たところが海ではなく陸地（大陸）だったということもあろうが、深い、緑があるのは、ヨーロッパ大陸のドイツあたりだけで、あとは寒々とした茶褐色の大地だった。もちろん、飛行機の飛んだところの多くが砂漠の上ということもあろうが、インドや中国あたりでは、点々としたハゲ山というところが多かった。私はその時、驚嘆の思いで、〝地球の砂漠化〟を実感したのである。それに比べれば確かに、日本列島の上空は緑が多かった。熱帯雨林地方は地球上で一番緑が多いだろうが、その破壊も進んでいる。北の方は言うまでもなく、北欧を除いては延々と白い世界が続く。

最初にも、述べたこの夏の異常少雨は、関東地方だけでなく、日本列島の緑を確実に茶褐色化している。もちろん一挙にではないが樹木が一本ずつ枯れていく姿を、この夏私は中国地方でも、関西地方でも、中部・飛騨地方でも目の当りにした。過度の開発により、干潟も海岸線も急激に減り、日本列島から松の木が消えるのもそんなに遠くないのではないかとさえ思えてくる。宇宙飛行士の毛利さんが衛星から東京上空を見て、意外と空気がきれいなのではないかと言い、多くの日本人はその気になって、政治家は喜んだかもしれないが、それは単に湿気がなくカラカラに乾いていたというだけのことだろう。もちろん、中南米の都市や東欧や中国等の公害対策技術の遅れに対し、日本の公害対策技術の高さを宣伝することにはなろうが。ちなみに、つい最近も、中国から公害を含んだ大気が日本上空に流れ込んでいるなどということも言われる。ここでも日本人は戦争と同様に被害者顔をしたがる。しかし、日本上空もひどく汚れていることは確かで、その大気が地球上の他の国々へ害を及ぼしている。つまり大切なことは、大空は一つであり国境はないということである。そして毛利さんも言う通り、地球上も連続しているのである。

昨年（一九九二年）、ブラジルでおこなわれた「地球環境サミット」では、地球は子どもから借りているもの、ということが盛んに言われたようだが、われわれ日本人もこのようなナイーヴな考え方をもつべきだろう。地球は大人が自分達のために好き勝手に使用（開発）して良いのではなく、子ども達から借りており、より豊かな地球にして彼らに返さなければならないのだ。「環境による教育」を行うためには、地球の自然環境（それは身の回りの自然環境の集合体である）を守ることが原点とならなければならない。より良い環境によって人はより良く育つのである。

ヨーロッパ的、中国的なるもの

周郷先生は、M・ランゲフェルトに言及する前に、「アメリカとヨーロッパは、大へんに違うことを、この際あらためてよく考えておくことが必要だと思う。」と述べておられる。周郷先生はもちろんヨーロッパ好きということになる。私も、イギリス、ドイツ、スイス、フランス、イタリア、デンマーク等ヨーロッパの国々の自然環境の素晴らしさに感激し、新幹線が走る前の日本の田園風景と重ねてしまう。明治時代に日本を訪れた外国人達は、日本の田園風景を故郷



の風景に重ねて感激したのではなかろうか。その日本の風景も、高度経済成長に入って新幹線ができてから一変した。極端かもしれないが、日本は世界の工場になるとともに、世界のゴミタメにもなったのである。

一九九一年の春に、アメリカのニューヨーク、ワシントン、ボストンを訪れたが、ニューヨークにはさすがにびっくりした。ニューヨークのコンクリートで固められた緑のない干からびた街は、東京もいつかこうなるのではという恐怖のようなものを私に感じさせた。考えてみれば、新幹線が縦横に走る日本列島は、それ自体がマンハッタン島のようなものかもしれない。東京に超高層ビルがあたりかまわず林立し出したのはここ五、六年のことに過ぎない。バブル経済が崩壊しないままで、皇居の緑（松）がなくなれば、東京は確実にニューヨークに近づいていたことだろう。

しかしニューヨークで感心したこともある。地下鉄に乗ると、小錦のように大きい（少し大げさだか）黒人にはさまれて、おしゃれをしたきゃしゃな白人女性が、座って平然と本を読んでいるのだ。正直のところ、ここまで白人と黒人が共存しているとは思わなかった。ヨーロッパで見る白人と黒人の風景とはやはり一味違っていた。地下鉄には乞食も多い。いわゆるホームレスの問題を始め、ヨーロッパ（とくにイギリス）の階級制を批判したアメリカで貧富の格差は急速に進んでいるようだ。

いずれにせよ私は、「世界一高く、世界一大きく、世界一広く、世界一強く……」を目ざし熾烈な競争社会をつくり出したアメリカという国（国民）の、一つの結果をまざまざと見たという感じがした。

一九九一年の夏には、中国の北京と武漢を訪れた。北京の高層建築・住宅、道路などを見て、私は北京は近々世界最大の整然とした近代都市になると思った。考えてみれば中国は、日本から侵略戦争を仕掛けられて以来、第二次大戦後の現在までの四十年間余を除けば、ほとんどいつも世界の中で大国であり続けた。今は、戦後復興期にあるとみるべきだろう。周郷先生が

中国を訪れたのは一九七七年だから、毛沢東批判も始まっていた頃だろう。周郷先生は毛沢東路線・文化大革命に一定の共感をもっておられたから、事態の進展には驚かれたろうが、中国の人々の自然さ、素直さ、愛想の良さに魅かれたのではなかろうか。

実際、私が接した中国人達も改革・開放路線のもとで、毛沢東を敬愛し、私を含めた日本人に対して大変好意的であった（もちろん、経済大国の友人ということもあろうが）。と同時に、花を愛し自然の大地を愛する姿も印象的だった。中国は列強の植民地支配を受けていただけに、逆に外国に対して開放的であり、イギリス、ドイツ、フランスなどの影響もいろいろのところで感じる。アナーキーともいえる自由ささえ感じられるのである。その意味では日本人よりはるかに国際化しているともいえよう。

周郷先生は、このような自由でかつ一定の質素な整いをもったヨーロッパ的、中国的な自然環境、人間のあり様を好ましく思われたのではないかと私は思う。

世界市民育成としての幼児教育

周郷先生の教育についての考えをつきつめていくと、学校（幼稚園・保育園も含む）教育はいらないということになってしまいそうである。とくに先生は教育者としての母親の役割を強調される。保育園・幼稚園よりは母親のもとで教育することを重視しているようである。しかし保育園・幼稚園を含む学校教育を否定してはいない。それはイヴァン・イリッチの脱学校論の正確な理解を求めるところでも明らかである。

学校教育があって一定の平和がもたらせられることは、世界各地で勃発している民族紛争を見ても明らかだろう。しかし、学校教育が人民管理、国家強化（何でも世界一）の方向へ向かえば破綻することは、ソビエト、東独の崩壊、ベトナム戦争後のアメリカを見ても明らかだろう。

要するに、周郷先生が強調される母親の教育力を、幼稚園・保育園（学校）に保持することが大切なのである。保育者・幼児教育者がエデュコロジーの考え方

をもち実践することが大切なのである。それは保育者・幼児教育者が、最良の母（父）になるということでもある。

文部省、厚生省から出された新しい幼児教育の方向は、慨ねこのような考え方に立ち、周郷先生が厳しく批判されたアメリカ直輸入の発達（認知）心理学から、ヨーロッパ的教育学（アメリカのデューイも含む）への転換と見ることもできよう。ただし周郷先生も強調されていたように、教育学が学としての体系をめざし、〝教育学盛えて教育滅ぶ〟ということにならないように注意しなければならないだろう。

いずれにせよ世界を駆け足で歩いて感じることは、世界の人々の共通のモラル、いわば世界市民のモラルとして、thanks（sorry），give way，charity，という三つの精神（スピリット）があるということである。これは三つ別々ではなく一つの精神（スピリット）である。これはキリスト教国でない中国でも感じたことである。考えてみれば日本でも、「ありがとう」（「すいません」）、「お先にどうぞ」、「損得を度外視して……」などということは、ついこの間まで（やはり高度経済成長、バブル経済下での競争主義の蔓延以前ということになろうが）普通の共通のモラルであった。

国際化社会の中での新しい日本人は、この精神を再度身に付ける必要があろう。経済成長が止まっても自然環境を守ること、国益のためではなく、金がかかっても自衛隊と別組織のＰＫＯ活動をすること、世界の人々が買ってくれるからこそ日本の技術力等も生かされていると自覚すること、これらの他にもこの精神（スピリット）の具体化はさまざまな形であるだろう。それを求めることが幼児教育の原点だと私は考える。

（お茶の水女子大学）